

明治初期の陸軍軍医学校の卒業生

黒澤嘉幸

日本医史学雑誌第四十七巻第二号 平成十二年三月三十日受付
平成十三年六月二十日発行 平成十二年七月十五日受理

〔要旨〕明治のはじめ陸軍が軍医部を設置した時、軍医学校の建設は軍医部創設の為の重要事業の一つであった。本校の目的は軍医を養成することであった。その意味において本校の卒業生について調査することは大きな意義があると思われる。しかしながら、本校の卒業生名簿は所在不明である。そのため、その卒業生を調査し、次の項目を明らかにした。1. 本校の卒業生は少なくとも三十一名である。2. 卒業生は西南戦争、日清戦争に軍医として出征した。3. 卒業生の大半は生涯軍医として奉職した。

キーワード——陸軍軍医学校、軍医生徒、陸軍軍医学校卒業生

一 はじめに

明治四年に松本良順は兵部省の招請に応じ軍医部の創設にあたることになった。その時松本良順は軍医部創設に必要な重要施策項目を兵部省に建議したが、その項目の一つに陸軍軍医学校の設立が含まれていた。

この陸軍軍医学校の目的は軍医志願の若者を募集し、身体検査、学科試験の合格者を軍医生徒に採用し、普通医学及び軍陣医学を教育して、卒業した者を軍医に採用することであった。

しかしながら、本校の卒業生名簿は現在不明で、軍医学校の成果は明らかではない。

そのため、本研究は卒業生名簿の復元及び卒業生の卒後の活動を明らかにすることを目的にした。

二 軍医学校卒業生名簿

(一) 陸軍省日誌について

陸軍省日誌は明治五年から陸軍省が発行した文書で、官報が発行される明治十六年まで陸軍に関する公報の役割を果たしていた。

その中には叙任辞令等に関する記事も含まれているので、日誌について軍医の叙任記録を検索した。

その結果、「明治某年某月某日 陸軍軍医試補申付 軍医生徒 氏名」という形式を持った叙任記録を数ヶ所で発見することができた。その内容は次のとおりである。

明治七年四月五日⁽¹⁾ 瀧野 盤 半井直道

明治七年七月八日⁽⁵⁾ 杉山由哲 廣田静逸 玉置泰順 渡邊盛治

明治七年九月十四日⁽⁶⁾ 竹内濤貞 二階堂順庵 高橋春庵 田中周甫 加藤 壽

前述の軍医学校に関する規則によれば、軍医生徒とは規定の入学試験に合格したのち、軍医総監より陸軍卿に上申し、その指令を受けて軍医生徒になることを許されたもので公式の身分である⁽⁷⁾。したがって上記の十一名は明らかに軍医学校卒業生である。

(二) 陸軍衛生部旧事談について

陸軍衛生制度史の付録陸軍衛生部旧事談^⑧の中で、石黒忠憲は軍医学校出身の軍医について次のように述べている。
 「我が陸軍衛生部では先ず教育に目をつけたから、各兵科の教育の為の兵学寮が置かれた頃に軍医学舎を設け、生徒を集めて普通医学から教授した。

この生徒から出身した者は数人あったが、明治三十九年の今日現存しているのは、松島玄景、武谷水城、長江清人、佐藤直次郎、茂木政則、脇尾端、高田忠良、立山頼景、高橋春庵等の人々である。小松軍医は先月病院船より下りて死亡した。

三十年一昔というが三十余年前のことを思い出すと今昔の感が起きる」

この旧事談は明治三十九年に語られているが、石黒忠憲が挙げた人物の中には当時現役軍医であった者もいるので、その発言は信頼性が高く、この氏名の人達が軍医学校出身であることは疑う余地がない。

なお、武谷水城は軍医学校卒業時は尾石豊、その後武谷豊と名乗っており、脇尾端は陸軍名簿では脇尾端となっている。

そこでこの人達の卒業年次を確認するため陸軍省日誌を再検索したところ、次の三個の叙任記録を発見することができた。

明治九年八月十八日^⑨

任陸軍軍医補 松島玄景

陸軍軍医試補申付 長江清人

陸軍軍医試補申付 茂木政則

陸軍軍医試補申付 脇尾端

この記録に載っている人名はすべて旧事談中にあるので、全員軍医学校出身と考えられる。

次の二個の記録は「明治某年某月某日 陸軍軍医試補申付 氏名」という形式の叙任記録で、その中に石黒忠恵の語った氏名を含んでいるものである。その氏名には○を付す。

明治十年二月二十二日^⑩

○尾石 豊、内山伸一、野村萬里、○立山頼景、○小松 運

明治十年二月二十四日^⑪

重地為則、浅井仁庵、上野元立、菊地盛文、原田信太郎、森正多郎、松尾 栄、河野 亨、中村仲庵、○高田忠良、○佐藤直次郎

この二個の記録はいずれも石黒忠恵が指摘した軍医学校卒業生の氏名を含んでいるばかりでなく、その叙任月日が「明治十年三月八日軍医生徒の卒業と共に軍医学校廃止を命ぜらる」という時期に近いことを考えると、全員軍医学校卒業生の可能性が高いのである。

(三) 高田忠良の懐旧談について^⑬

彼は昭和十一年陸軍軍医学校創立五十周年式典の時、請われて明治十年二月彼が軍医学校を卒業した時の状況を大要次のように語っている。

「私は明治七年九月通学生として軍医学校に通い、明治八年十月試験に合格して正式に軍医生徒の辞令を受け、学校内に起居するようになりました。

明治十年二月西南戦争が起こり、山縣陸軍卿の指令によりまだ在学中であった我々も出征いたすことになりましたので、予定の卒業期を繰り上げて臨時卒業試験が行われ、直ちに軍医試補即ち今日の見習医官を申し付けられました。その時私共と一緒に卒業任官致した者が二十五名ありましたが、今日まで生存しておりますのは武谷水城君と私のみでこ

ざいます。

軍医学校卒業と同時に『御用これあり神戸表へ差遣』という辞令を頂き、品川から船に乗り神戸に赴きました」

この資料は明治十年二月の軍医学校の卒業の状況を伝える唯一の史料と考えられる。

卒業式の翌二十五日には、緒方惟準も大阪表差遣の命を受けており、軍団病院日記抄には「二十五日東京に於いては、緒方一等軍医正以下軍医試補十名を率いて神戸に出張すべきの命を拝す」と記述されている。また、軍団本営大日記防衛研究所所蔵によれば、二月二十四日軍医試補に任命された十一名は二月二十八日征討軍営病院付を命ぜられている。これは高田忠良の言を裏づけるものと思われる。

なお、高田忠良と一緒に卒業任官したものは二十五名であったと述べている。

明治十年十一月の職員録¹⁶によると、軍医試補の欄では一番が上野貞雄、次に尾石豊等前述した十六名の氏名が並び、その次に林田少一郎となっている。

通常このような名簿では、同階級の場合先任順に並べるのが通例であるから、十年二月を中心にして前後数か月間の軍医試補昇任者の状況を調査した。

その結果、当時の軍医試補昇任者は明治九年十一月十三日付上野貞雄¹⁷、同九年十一月十八日付一丸正親¹⁸、同十年二月二十二日付尾石豊外四名、同十年二月二十四日付重地為則外十名、同十年三月十四日付林田少一郎¹⁹となっている。ただし一丸正親は十年六月に軍医補²⁰に昇任している。

したがって職員録は明治九年十一月十三日付軍医試補の上野貞雄から明治十年三月十四日付軍医試補の林田少一郎までの間に軍医試補を申付けられた者は尾石豊以下十六名だけであることを示しており、軍医学校の繰り上げ卒業生は十六名であると推定せざるを得ない。

(四) 西南戦争と軍医補充

明治の初期、陸軍は当時士官に採用すべき適任者が少なかったため、資質のある者を出仕という員外官に採用し、士官の補充要員として育成していた。

明治九年四月二十一日出版の職員録²¹⁾によれば、陸軍省の出仕官のうち、出仕医官の数は十二等出仕から十五等出仕まで五十六名が数えられた。

したがって明治十年二月、西南戦争が起こり、軍医の増員が必要となった時、軍医部は軍医補充の為に次の手段をとることが可能であった。

ア、出仕医官を軍医に採用すること。

イ、軍医生徒を繰り上げ卒業させて、軍医に採用すること。

ウ、民間から軍医を採用すること。

戦争勃発による出仕医官から軍医への登用は、陸軍省日誌によれば、

明治十年三月十七日²²⁾

軍医試補申付 十五等出仕 山崎桂策

同 同 遠山春平

明治十年三月十八日²³⁾

軍医試補申付 十四等出仕 柳下昌達

同 同 十五等出仕 田中常明

同 同 矢野利之

を皮切りに出仕官から続々と軍医に採用されている。

これに比し外部からの募集は難渋し、次のように五月頃から若干の者が採用された。

明治十年五月二十六日²⁴

軍医試補申付 林徳門

同 堀内亮之輔

同 松川修

明治十年五月二十九日²⁵

軍医試補申付 山内政詮

同 有馬太郎

同 山本佳橘

同 笠島省吾

すなわち部外者の軍医採用実施は五月以降であつた。

前述した明治十年二月二十二日軍医試補に任命された五名、二月二十四日任命された十一名のうち、尾石豊、立山頼景、小松運、高田忠良、佐藤直次郎の五名はすでに軍医生徒であつたことは明らかである。

残りの十一名を検討してみると、明治九年の職員録出任官の欄にはいずれも記載されていないので出任官ではない。また、出任官は十年三月から軍医に採用されているので、二月採用の十一名は該当しない。

また、戦争に伴う部外募集による軍医は五月頃採用されているので、二月任命の十一名は該当しない。

以上の点を考慮すると、二月二十二日、二月二十四日軍医試補に任命された十六名は全員軍医生徒であつたと考えられるのである。

(五) 軍医学校卒業生名簿

以上の結果をまとめてみると、軍医学校卒業生の数は三十一名でその名簿は次のとおりである。

明治七年四月五日卒業

瀧野盤、半井直道

明治七年七月八日卒業

杉山由哲、廣田静逸、玉置泰順、渡邊盛治

明治七年九月十四日卒業

竹内濤貞、二階堂順庵、高橋春庵、田中周甫、加藤壽

明治九年八月十八日卒業

松島玄景、長江清人、茂木政則、脇屋端

明治十年二月二十二日卒業

尾石豊(後に武谷豊)、内山伸一、野村萬里、立山頼景、小松運

明治十年二月二十四日卒業

重地為則、浅井仁庵、上野元立、菊地盛文、原田信太郎、森正多郎、松尾栄、河野亨、中村仲庵、高田忠良、佐藤

直次郎

三 卒後勤務の動態

卒業生の卒後勤務の動態を的確に表現することは容易ではない。

そこで卒後勤務義務年限履行者数、佐官昇任者数、西南戦争現役出征者数、日清戦争現役出征者数等を指標にして、

卒業生が草創期の軍医部の任務にどの程度寄与したか検討してみることにした。

(一) 卒後勤務義務年限履行者数

軍医学校規則第十二条⁽²⁶⁾によれば、卒後十年間は必ず軍医として奉職すべしと規定されている。三十一名中この規定に触れた者は次のとおりである。

竹内濤貞、田中周甫

明治九年以降職員録に載っていない。これは竹内等が卒業した時、学校側が卒業証書を交付しなかったため、生徒が騒ぎだし、明治八年三月二十九日付、松本順が「其方儀軍医生徒竹内濤貞外四名軍医学校卒業するに当たり先に免状相渡すべきの処其の儀なく軍医試補に選挙する科に依り謹慎十日仰せ付けらる」という処分を受けた事件にかかわりがあると思われる。

渡邊慶治

明治十一年以降職員録に載っていない。

原田信太郎、半井直道

明治十二年以降職員録に載っていない。

結局三十一名中二十六名が義務を履行したことになる。

(二) 佐官昇任者数

明治前期には聯隊の軍医長などは二等軍医正(後の軍医少佐)であったので、佐官以上の軍医は陸軍軍医部の要であった。したがって卒業生の二等軍医正以上への昇任者数を調べることは、其の資質をはかる有力な資料と思われる。

二等軍医正への昇任者氏名および昇任年月日は次のとおりである。⁽²⁶⁾

杉山由哲(明治十九年五月二十八日)、松島玄景(明治二十年十一月十六日)、瀧野盤(明治二十一年十一月三十日)、武谷

豊（明治二十三年六月六日）、茂木政則（明治二十四年十一月十二日）、加藤壽（明治二十六年二月一日）、脇屋端（明治二十六年四月六日）、佐藤直次郎（明治二十六年十一月一日）、長江清人（明治二十七年十一月十五日）、立山頼景（明治二十八年一月五日）、森正多郎（明治二十八年四月十一日）、野村萬里（明治二十八年五月十五日）、小松運（明治二十八年九月十五日）、高田忠良（明治二十八年九月十七日）、菊地盛文（明治二十九年三月十一日）、松尾栄（明治二十九年十一月七日）、河野亨（明治三十年一月二十七日）

(三) 西南戦争現役出征者数

この戦争は勇猛な薩摩軍との戦いであつたため、官軍は死傷者が多くその対応に陸軍軍医部は苦慮し、全力をあげて軍医を戦場となつた九州に送りだした。

この戦争に出征した軍医学校卒業生は次の二十八名である。⁽³⁰⁾

瀧野盤、半井直道、杉山由哲、廣田静逸、渡邊盛治、二階堂順庵、高橋春庵、加藤壽、松島玄景、長江清人、茂木政則、脇屋端、尾石豊、内山伸一、野村萬里、立山頼景、小松運、重地為則、浅井仁庵、上野元立、菊地盛文、原田信太郎、森正多郎、松尾栄、河野亨、中村仲庵、高田忠良、佐藤直次郎。

彼等の多くは当初軍団病院等に投入されたが、戦域の拡大に伴い、戦闘旅団の軍医部に配置され、九州の山野を踏破して第一線の戦傷者治療にあつた。

たとえば明治十年九月二十四日現在の各旅団軍医部所属者は次のとおりである。⁽³¹⁾

第一旅団軍医部 武谷豊、上野元立、中村仲庵、原田信太郎

第二旅団軍医部 瀧野盤、河野亨、佐藤直次郎

第三旅団軍医部 野村萬里、森正多郎

第四旅団軍医部 重地為則、菊地盛文

別動第二旅団軍医部 廣田静逸、浅井仁庵、高田忠良

(四) 日清戦争時現役出征者数

日清戦争の起こった明治二十七年までに、軍医学校卒業生のうちで、前述の軍医勤務義務年限不履行五名の外に現役を退いた者は次のとおりである。

(物故者五名)⁽³²⁾

玉置泰順(明治九年十月二十四日熊本にて戦死)⁽³³⁾、中村仲庵(明治二十年八月十八日死去)、内山伸一(明治二十一年五月十五日死去)、重地為則(明治二十三年十一月一日死去)、杉山由哲(明治二十六年一月三十一日死去)

(予備校編入四名)⁽³⁴⁾

廣田静逸(明治二十二年六月十日)、二階堂順庵(明治二十二年六月十日)、浅井仁庵(明治二十四年四月二十二日)、高橋春庵(明治二十六年四月十九日)

したがって明治二十七年に現役に勤務した者は十七名で、国内国外の軍衛生機関に勤務した。彼等の主な配置は隊付軍医や野戦病院長などであった。

(五) 日露戦争

明治三十七年現役にあつた者は、長江清人、茂木政則、武谷水城(武谷豊)、高田忠良、佐藤直次郎の五名で主に師団軍医部長等で活躍した。

卒業生の動向を顧みて注目されるのは、彼等の多くが軍医を生涯の職としたことである。

高田忠良は卒業時の回顧談⁽³⁶⁾の中で、西南戦争従軍の時、新進の軍医となつて出征したので非常に得意であつたと述べているが、多くの卒業生も同様に軍医学校卒業生のプライドを抱いていたことが、永年軍医として職務に励む素因となつたのではないかと思われる。

また軍政規模の小さい時代にもかかわらず卒業生の過半数が佐官以上に昇進していることは、その職能が部内で評価されていたことを示している。

なお、明治二十年に軍医二階堂順庵は「明治二十年第一回仙台医術開業試験委員」³⁷を委嘱されているが、これは卒業生の部外評価を示唆する一例とも考えられる。

四 まとめ

明治初期の陸軍軍医学校は存続期間が短かったにもかかわらず三十一名の卒業生を出した。この卒業生の特性は単に軍医充足困難な時其の不足を埋めるのに役立っただけでなく、その多くが軍医を生涯の職とし、平時、戦時とも職務に精励したことにある。

本校は軍医部草創の時期にあつて学校を整備し、卒業生を送り出して軍医の不足を補いその本務を果たすとともに、生涯を軍医として奉職する人材を育成した点において、その存在意義は大きくかつ異色であつたと思われる。

なお本研究にあたって職員録及び東京医事新誌の検索について御指導御便宜を賜りました順天堂大学医史学研究室ならびに文献について御教示いただきました深瀬泰且先生に厚く御礼申し上げます。

文 献

- (1) 小川鼎三・酒井シヅ『松本順自伝・長与専斎自伝』八一頁〜八三頁、平凡社、一九八〇。
- (2) 内閣記録局『法規分類大全 第四八』四頁〜五頁、原書房、東京、一九七七。
- (3) 内閣官報局『法令全書 第六卷』一二〇六頁〜一二一四頁、原書房、東京、一九七五。
- (4) 陸軍省『陸軍省日誌』明治七年、三〇号、八頁。

- (5) 陸軍省『陸軍省日誌』明治七年、五五号、一頁〜二頁。
- (6) 陸軍省『陸軍省日誌』明治七年、七二号、三頁。
- (7) 陸軍軍医団『陸軍衛生制度史』四九頁、小寺昌、東京、一九一三。
- (8) 陸軍軍医団『陸軍衛生制度史 付録陸軍衛生部旧事談』二四頁、小寺昌、東京、一九一三。
- (9) 陸軍省『陸軍省日誌』明治九年、三七号、六頁。
- (10) 陸軍省『陸軍省日誌』明治一〇年、八号、二頁。
- (11) 前掲(10)九頁。
- (12) 陸軍省『陸軍省日誌』明治一〇年、九号、八頁。
- (13) 高田忠良『幸楽に於ける挨拶』『軍医団雜誌』二八三号、一八〇二頁〜一八〇五頁、一九三六。
- (14) 陸軍省『陸軍省日誌』明治一〇年、八号、一〇頁。
- (15) 参謀本部『征西戦記稿付録、軍医病院日記抄』一頁、一八八七。
- (16) 『明治初期の官員録職員録』第三卷、一九八頁、寺岡書房、東京、一九七七。
- (17) 陸軍省『陸軍省日誌』明治九年、四八号、一〇頁。
- (18) 陸軍省『陸軍省日誌』明治九年、四九号、九頁。
- (19) 陸軍省『陸軍省日誌』明治一〇年、一〇号、二頁。
- (20) 陸軍省『陸軍省日誌』明治一一年、八号、一八頁。
- (21) 前掲(16)三七頁〜三九頁。
- (22) 陸軍省『陸軍省日誌』明治一〇年、一一号、一八頁。
- (23) 陸軍省『陸軍省日誌』明治一〇年、一〇号、六頁。
- (24) 陸軍省『陸軍省日誌』明治一〇年、一七号、一〇頁。
- (25) 陸軍省『陸軍省日誌』明治一一年、七号、一五頁。
- (26) 前掲(7)五〇頁。

- (27) 鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』二〇八頁、東京医事新誌局、東京、一九三三。
- (28) 陸軍省『陸軍省日誌』明治八年、二五号、六頁。
- (29) 内閣官房局『官報明治編』龍溪書舎、東京、一九八三。
- (30) 西村文雄編『明治十年西南戦役衛生小史』一六八頁〜一七七頁、陸軍軍医団、東京、一九一二。
- (31) 『新編西南戦史』八四頁〜一〇四頁、陸自第八混成団本部、熊本、一九六二。
- (32) 前掲(29)。
- (33) 陸軍省『陸軍省日誌』明治九年、五〇号、七頁。
- (34) 前掲(29)。
- (35) 陸軍省『陸軍現役将校同相当官実役停年簿』一九〇四。
- (36) 前掲(13)一八〇二頁〜一八〇五頁。
- (37) 官報 一一三四号、明治二〇年四月一四日。

Graduates of the Japanese Military Medical College in Early Meiji

Yoshiyuki KUROSAWA

When the Japanese army established Army Medical Corps in early Meiji, one of its main objectives was to create a medical school in order to turn out medical professionals for the armed forces.

The follow-up research of its graduates provides significant material for understanding its whold picture, however, the list of graduates is not known. Nevertheless, the survey of its graduates makes clear following points;

1. The number of the graduates is at least 31.
2. Graduates participated in the Southwestern Rebellion and the Sino-Japanese War as army GP.
3. The majority of graduates served the armed forces to the end.